

「不便のスヌメ」

大塚 忠彦

最近、「不便益」という言葉を聞くようになった。「不便益」というのは“不・便益”という意味ではなく、“不便・益”の意味だそうで、「不便がもたらす効用 (benefit of inconvenience)」のことだそう。手っ取り早く言えば、便利になり過ぎて面白味がなくなった世の中を元に戻そうということ。

「不便益学」という学問も生まれており、また京都大学にはヴァーチャルではあるが「不便益学システム研究所」なるモノも誕生しているらしい。

卑近な例で言えば、ワープロやパソコンが普及して以来、文字や文章を手で書く機会が少なくなり指をキーボード上に這わせるだけでややこしい漢字も即座に出てくるという塩梅になった。その結果、漢字の偏^{へん}や旁^{つくり}を思いだしたり、カナ釘流の字画を多少は整えてみたりまた風流にしてみたり、昔小学校の頃習った筆順を復習しながら書いて見たりというような文字を手で書くという“楽しみ”を失ったばかりか、漢字そのものも忘却の彼方に押しやってしまっ、文字の成り立ちなどに思いを馳せるということも無くなってしまった。このような“不・便益”を解消して逆に“不便・益”を生み出すことを「不便益」というのだそう。

さて、我々の趣味の登山の世界でもこのようなことが起こっているのではあるまいか。何十年前も前からの「〇〇名山」などのカタログ登山をその嚆矢として、山岳出版社や登山用具メーカーやツアー会社の餌食になって「今年の夏こそ、△△ツアー登山・完全ガイド」や「〇〇名山・一筆ガイド」などに出掛けるなどという羽目に陥っている。猫も杓子もこの風潮に乗り遅れてはならぬと一斉に駆けだしたのだから中高年登山ブームや山ギャール登山ブームを惹起し、山はオーバーユースになってしまい、加えて遭難事故の増加という情けないことに相成っている訳である。路線が引かれたカタログ登山に出掛ければ、途中何を考える必要も無く線路に乗って山に登れて帰宅できるという安直な寸法である。

ま、それはそれとしても、最近の IT 技術の進歩による登山情報の即時提供と詳細化が街に溢れていることに眼を瞠らざるをえない。例えば、今日登られた甲斐駒・赤石沢／ダイヤモンド B フランケ赤蜘蛛ルートの登攀報告がその夜には詳細な写真付きでブログなどに掲載されている。クラックの崩壊状態は勿論、打設してあるリングボルトの腐食具合、残置されているシュリングの状態まで鮮明に見えるのである。そこまでいなくても、一般縦走路の超最新の状態などもゴマンと UP されているので、これを見ただけでも現地に行った気分になる。即ち、その折々の山の実地の楽しみが前の晩に既にヴァーチャルで充たされている訳だから、現地での新鮮な楽しみも無いということになる。アホラシイ。

また、スマホと GPS 付登山であれば、人工衛星とスマホ搭載の地形図が自動的に山頂に導いてくれるので、読図して現地同定を行うなどという手間も要らないことになる。天気予報についても同様で、山岳気象専門会社の予報サービスを見れば即座に入手できるので、観天望気なども要らないという次第。良いことづくめであるが、何か空しくなってくるのではないか。登山という営為は冒険まではいかないとしても、やはり自分で何かを発見しながら行う行為であるから、そこに不明・不定要素があってもおかしくないし、むしろそれを求める行為でもあろう。そのためのリスクも増大するが、それは覚悟の上。

最近、北極の一日中真っ暗な極夜を犬と二人だけで数ヶ月も歩いた冒険家・角幡唯介は GPS を持たず六分儀だけを持って出かけ、自位置を知るための唯一の道具である六分儀も失ってしまっ、真っ暗な北極の闇の中を六感だけで歩いたそうであるが、これこそまさに「冒険」(不便益)ではなからうか。

(2018年5月記、シリウス・ジャーナル第55号「円居のひろば」掲載)